

教科単元「防災とまちづくり」の受講者にみる 文系・理系の学生間の「防災対応」のとらえ方の差異 2

目山直樹*・井上浩**

*徳山工業高等専門学校・**周南公立大学

1. はじめに

本稿は、2023年度自然災害研究協議会中国支部部会で報告した「教科単元「防災とまちづくり」の受講者に見る文系・理系の学生間の「防災対応」のとらえ方の差異」に引き続き、2025年度に実施した内容に基づく「続報」である。

1.1 周南公立大学「持続可能な社会とダイバーシティ」の単元「防災とまちづくり」

周南公立大学（以下、周南公立大）の共通科目として「持続可能な社会とダイバーシティ」という科目（担当の一人が共著者の呉賛女史である。共著者の井上氏がひきついでいる）があり、15週の授業のうち9講を「防災とまちづくり」の単元に位置づけ、目山が担当することになった。

2025年度には、周南公立大側の受講者と人数（109人⇒194人）と所属学部（2学部から再編後3学部）が増加している。結果として、周南公立大側に理系学部の情報科学部と看護学科が加わったため、周南公立大は文系、徳山高専は理系という単純な比較はできなくなっている。

なお、オムニバス形式の授業で、目山に与えられた配点は7点であった。7点満点のレポートを受講者に課し、採点し評価した。また、formsにより受講者アンケートを行い、「防災」に対する認識を確認するとともに、災害時の対応についてたずねている。

1.2 徳山高専「都市計画」の1単元「都市と防災」

徳山工業高等専門学校土木建築工学科（以下、徳山高専）の4年生（大学1年生に相当）の教科に「都市計画」（通年、2単位）があり、2014年度以来、目山が担当している。30週の単元うちのひとつに「都市と防災」がある。この単元はすでに一定のカタチで進めてきているが、2023年度から周南公立大学の授業「防災とまちづくり」との共通性を持たせ、同一の課題とformsアンケートを課すことで、周南公立大学の学生と徳山高専の学生を対象に、「防災対応」のとらえ方の差異を把握することとした。

2. 講義内容とレポート課題（2023年度～2025年度で共通）

2.1 講義内容の概要

講義内容は、2023年度から2025年度までの3年間共通の項目設定と内容によるものとした。授業進行と同時に、レポートへの書き込みを促し、授業後ただちにレポートを回収した。その後、formsによるアンケートを実施し、受講者の意識変化を把握することとした。

講義内容とレポートは、周南公立大、徳山高専とともに共通のものとした。

講義内容は、1現状把握として、現状把握について3点、書き込んでいただいた。すなわち、「防災」とSDG'sの関係性を問うもの（1点）、「まちづくり」とSDG'sの関係性を問うもの（1点）、「防災」×「まちづくり」とSDG'sの関係性を問うもの（1点）を授業進行とともに書き込みの時間を設けた。

共通の認識を築いた段階で、その次の講義を進め、最後にレポートへの回答時間をとった。すなわち、現在

の「防災×まちづくり」に対する認識を問うもの（周南公立大生は周陽地区を対象に、高専生は徳山高専周辺を対象と限定した。さらに自宅周辺について前述の理解を確認した）（1点）、つづいて、「防災まちづくり」のための現状からの改善の視点（あなたのアイディア）を問うた（1点）。最後に、防災まちづくりを具体化するための工夫や仕組みについての提案を問うた（2点）。

2.2 レポート課題の設定と評価指標

レポート課題は、2023年度と2025年度とで同様の項目を設定し、A4版用紙1枚におさめられている。授業では、授業時間内に記入し、授業後、直ちに回収することとした。評価指標は、現状認識で4点、改善点で1点、工夫や仕組みの提案で2点の配点とした。

3. 受講者別のレポートの評価

3.1 周南公立大学の受講者

2023年度の周南公立大生（以下、大学生）の受講者は109名で、レポートの得点の平均は5.1点であった。徳山高専生（以下、高専生）の得点に比べ1点ほど低い水準にあるが、これは、3点から7点の範囲に得点がばらついていることや、0点などの評価があることが影響している。レポート評価7点のもののうち、目山が最高評価をつけたものは4年生の学生であった。

2025年度は、受講者が194名で、得点の平均点は6.2点であった。（表-1）

3.2 徳山高専の受講者

2023年度の高専生のレポート評価点の平均は6.1点と高かった。これは8割方の受講者が7点ないし、6点に集中していること、得点の低いものがわずかであったことが要因といえる。高専生の場合、目山の授業を受講するのが4年目であり、慣れていることもプラスに働いているといえる。（表-1）

2025年度は、平均点6.4であった。

表-1 レポートの評価（2023年と2025年）

	周南公立大学		徳山高専	
実施日時	2023年6月13日	2025年6月10日	2023年6月23日	2025年6月3日
受講者※	109	194	41	42
レポートの得点 (平均点)	5.1	6.2	6.1	6.4
7点	22	92	16	24
6点	24	63	16	11
5点	22	23	7	6
4点	29	11	1	1
3点	10	4	1	0
2点	1	1	0	0
1点	0	0	0	0
0点	1	0	0	0
※レポート提出者				

4. 受講者別のformsアンケートの評価

Formsアンケートでは7問を設定した。最初の2問はハザードマップで、次の3問は、居住地区での危険性認識が、防災、防犯、交通安全の面から強くなったかをたずねている。最後の2問は避難場所に関するもので、とくに7問目は、受講後、避難場所を決めたかを問うている。

2023年度と2025年度の2回の受講生のアンケート結果を以下に整理する。(表-2)

4.1 周南公立大学の受講者

大学生は、2023年度の結果では、危険認識について、防災、防犯、交通安全のいずれも「強くなった」と認識を変化させている一方で、あらかじめ避難場所を決めているものは2割程度で、受講後、決めたものも2割程度と少なかった。

2025年度は、交通安全以外の項目で意識が向上している。受講後、避難場所を決めたものは2割から4割に向 上している。

4.2 徳山高専の受講者

高専生は、2023年と2025年ともに、ハザードマップを知っているものはほぼ全員で、みたことのあるものも90%を超えており、高水準にある。徳山高専の周辺に住んでいるものが少ないこともあり、危険性の認識はいずれも高くない。一方、避難場所を決める意識は、2023年の6割に対して2025年は4割と低下した。ただし、すでに決めているものが6割いるので、講義の中で、改めて決めるなどを推奨するようにしたい。

表-2 formsアンケートの結果(2023年と2025年)

実施日時	設問	周南公立大学		徳山高専	
		2023年6月13日	2025年6月10日	2023年6月23日	2025年6月3日
回答者※		98	194	30	42
アンケートの回答	ハザードマップを知っていたか	92.9%	99.0%	100.0%	97.6%
	ハザードマップをみたことがあるか	69.4%	89.1%	93.3%	92.9%
	居住地区の防災上の危険性の認識	87.8%	90.2%	56.7%	85.7%
	居住地区の防犯上の危険性の認識	79.6%	83.3%	46.7%	59.5%
	居住地区の交通安全の危険性の認識	88.8%	83.0%	60.0%	78.6%
	避難場所を決めている	21.4%	37.6%	76.7%	59.5%
	受講後避難場所を決めた。	23.5%	43.5%	66.7%	43.9%
※アンケート回答者					

5. 周南公立大・徳山高専の受講者による得点等の差異

5.1 レポートの得点にみる差異

2023年のレポートの得点の差は、文系・理系の差異というより、講師の授業に対する受講の慣れの差と結論付けた。2025年では、その差はほとんどなくなったため、講師の授業の進め方に均一性が出たと考えている。

2025年の大学生の得点からは、看護学科1年生で6.50、スポーツ健康科学科1年生で6.37と高得点を示している。これらは、学科の特性かもしれない。看護教育では、正しく伝えることが重要であるし、スポーツ指導ではルールを守ることが最低の条件となる(表-3)。2025年の高専生の得点は6.44とこれもまた高得点であった。

表-3 学部・学年別の得点状況（2025年、2023年）

2025年					2023年					
周南公立大学	6.16	1年生	2年生	3年生	4年生	周南公立大学	5.10	1年生	2年生	3年生
学部・学科						経済学部	4.74	5.30	4.36	
情報科学部	5.80					福祉情報学部	5.36	4.75		
人間健康科学部										
看護学科	6.50					徳山高専	4年生			
福祉学科	6.20	5.88				土木建築工学科	6.10			
スポーツ健康科学科	6.37									
経済経営学部	6.16	6.31								
人間コミュニケーション学科			6.33							
現代経済学科			6.00	6.00						
ビジネス戦略学科			5.92	4.62						
徳山高専	4年生									
土木建築工学科	6.44									

5.2 formsアンケートにみる差異

Formsアンケートでは、周南公立大生と徳山高専生で回答に際立った差異がみられた。ハザードマップをみたことがない周南公立大生が3割から1割いることを考えると、大学構内に「ハザードマップ」を掲示したり、学生たちに危険を意識させ、対応について考えていただくことが必要と考える。

一方、居住地区（高専生は徳山高専周辺が対象）における危険性の認識は、大学生で顕著に強まっており、今回の授業が影響していると考えている。高専生は、周南市外からの通学者が6割程度あることから、危険性の認識はさほど強くなっていない。この辺りの対応は、教材や対象地区の設定を再検討すべきかもしれない。

避難場所に対する認識は、県外からの学生が多い周南公立大生では認識が低いと見え、避難場所を決める行動に結びついていなかったが、2025年には改善されてきている。

6. まとめ

6.1 考察

得点だけに着目すると、周南公立大学と徳山高専の学生の歴然とした差はなくなってきたようである。大学生の出身地は8割が県外ということを考慮すると、周南公立大生は山口県や周南市、周南地域の「防災」「防災情報」になれていないとみたほうがよい。

「防災」について直接的に学ぶ高専生に対して、一部の学科のみ、防災を意識する局面を迎える大学生を考えれば、この共通科目の中で、防災意識を育てることは重要と考えている。

6.2 令和8年度に向けた対応

令和8年度は、この共通の単元を著者が担当する最終年度となるため、4年間の総括を試みるとともに、周南公立大の学部間での比較も進めていきたいと考えている。

謝辞:今回、周南公立大学と徳山高専で、あらたな教育連携に取り組む機会を得た。ここに至るまで、ご尽力いただいた関係各位に感謝したい。授業の中で、事前説明しているが、レポートとformsアンケートに応じていただいた両校の学生諸君に、深甚なる謝意を表す次第である。

参考文献: 目山直樹ほか (2024), 「教科単元「防災とまちづくり」の受講者にみる文系・理系の学生間の「防災対応」のとらえ方の差異」, 自然災害研究協議会中国地区部会研究論文集第10号, 57p-60p, 2024年2月